

# 昭和初期・高等女学校における作文処理と評価の実 際--金子彦二郎の発想・着想・構想指導

著者	田中 宏幸
雑誌名	清心語文
号	7
ページ	64-97
発行年	2005-07
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000278/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000278/</a>

## 昭和初期・高等女学校における作文処理と評価の実際

——金子彦二郎の発想・着想・構想指導——

田 中 宏 幸

### 一、はじめに——金子の暗示的指導

近代日本の中高等教育における作文指導は、初等教育に比べきわめて低調であると言われてきた。一九一一（明治四四）年の「教授要目」改正によって、週一時間の「作文」の時間が設けられたが、教師一人で生徒一五〇人以上を担当するなど苛酷な状況に置かれたために、指導が形骸化し、作文を書かせても「作り放し」になることが少なくあったのである。<sup>\*1</sup>

しかし、こうした困難な状況にあっても、優れた実践を展開した先達がいなかったわけではない。なかでも高等女学校を中心に顕著な業績を残した人物として、金子彦二郎（一八八九—一九五八）を挙げることができる。金子は、発想・着想・構想指導に力を入れ、生徒から伸びやかな自己表現を引き出していた。金子は特に、「暗示的指導」と名付けた指導に重点を置き、学習者に「想」（書くべき内容）をいかにして発見させるかという問題に正面から取り組んだのである。<sup>\*2</sup>

この「暗示的指導」とは、発想・着想を豊かにするために、文話等によって、生徒にあらかじめ着眼点や例文を提示する指導である。今回の事例では、次のような文話が提示されている。

音と色、これが私達に私達の世界を感じさせてくれる最も大切な媒介物である。其の「音」について、色々な方面から考察して見る事も面白いことであり、且つ有益なこともあらう。

一、音の発生原因のさまじく。

二、音を発する物体のさまじく。（和洋古今の楽器や、鐘や、鈴や、鼓や、鳥獣や、自然界―波・風・滝・雷等々の音など）。

三、同じ音も、四季や、朝夕や、群居や、孤独などといふ事情や環境の変化によつて異なる感情が呼び起されること。

四、人事に関係したいろ／＼な場合の音についての思ひ出。

などと挙げ来れば、書く方面はいくらもあらう。それらの中から、なるべく他人と同一経験でない、自己独特な材料と思はれるものを捉へ来つて、議論文よし、記事文よし、叙事文よし、抒情文よ

し、或は詩や童謡や和歌や戯曲などの姿態を以てするもよし、口語体よし、文語体よし、思ふがままの文の態様で書き認めて見るがよい。

尚ほ題は、提出された「音」とあるのを丸写しせずに、各自の作品に最もふさわしい題を選んでつけること。

これだけで、まだ題材が思ひ定まらない人は、教科書にある三つの文例を一わたり通読して見るがよい。(以上十分間以内)

ここに示された「暗示的指導」の特色は、①「着眼点や事例を挙げることによって、話題を多様に想起させていること」、②「新しい題材の発見を奨励していること」、③「題の工夫を求めることによって、主眼の焦点化を図っていること」、④「文体の制限を設けず、自由な表現を認めていること」の四点に整理することができる。

さて、こうした暗示的指導は、実際の作文にどう生かされ、どう評価されたのだろうか。また、金子は、作文の成績処理の段階においては、発想・着想・構想について、いかなる点を強調したのであるか。本稿においては、昭和初期の高等女学校における金子の指導記録と、今回新たに発見された当時の生徒作文を材料として、その特質を解明したい。

## 二、作文成立の経緯

今回取り上げる作文は、一九二九(昭和四)年二月三日(金)に、東京女子高等師範学校教授(当時)であった金子彦二郎が、茨城県立土浦高等女学校に招かれて、同校第二学年「は組」の女子五〇名を対象に、「作文科の成績処理の実地授業」を行なったときのものである。

この授業の詳細は、金子彦二郎『智目と行足との新国語教授』(培風館、一九三六年)<sup>\*)</sup>に収められており、その授業の質の高さは、野地潤家<sup>\*)</sup>によって既に指摘されているところである。だが、生徒作文の全貌は明らかでなく、作文例の水準を客観的に判断することが困難であった。

ところが、今回の調査によって、金子彦二郎のご遺族のもとに、この授業によって生まれた生徒作文の大半(未公開の四三編)が保存されていることが判明した。前掲書に取り上げられた作品七編と合わせると、一編を除き、ほぼすべてを確認することが出来るようになったのである。この未公開作品は、いずれも校名入りの原稿用紙に清書され、金子による圈点と評とが書き加えられたものである。(ただし、原稿の本文と評言とが同じ筆跡であることから、土浦高等女学校の担任教官もしくは生徒によって筆写されたものではないかと推定される。原本は、生徒に返却されたであろう。)

さて、この五一編が生まれた経緯を、簡単にまとめておこう。

まず、一九二九年一月三日（火）、土浦高等女学校の担任教諭によって、第一次指導が行なわれた。金子からの申し送りとして、「当時同校で採用中であった『現代女子作文』（改訂前の初版）巻二第一八課の「音」という題を指定し、これが暗示的指導として、同課に掲げてある前文を読み味へさせ、然る後即題「教室作文」として記述させて貰いたい」（前掲書、四五六頁）と依頼されていたのである。

ただし実際には、金子の依頼に反し、「即題」ではなく「宿題」として書かれたようである。というのは、五編の作文に一月二日以前の日付が記入されているからである。また、後掲の作文「音によって」（23番）や「恐しい音」（43番）の文面からも、宿題として課されていた経緯を読み取ることが出来る。一方、一月二日当日の日付を書いている生徒も少なくないので、おそらく、この日までに下書きをしてくるように指示され、当日清書することになっていたのであろう。

いずれにせよ、こうして書き上げられた作文は、金子彦二郎の下に送られ、作品の内容と形式に関する調査と分析（次頁「覽表参照」）が行なわれた。金子は、一ヶ月の間に、個々の作文に「評」を書き込み、「作文科の成績処理の実地授業」に臨んだのである。

### 三、生徒作文の傾向

金子は、五〇名・五一編の作文を調査するにあたり、「文題」「記述の対象」「文の生活背景」「記述態度」「素材」の五観点を挙げている。

#### （1）文題

「暗示的指導」として提示した文例の題（「おいさうな音」「あさましい響」）に影響されたのか、提出作品の八割にあたる四〇題が「…の音」（三五編）もしくは「…の響」（五編）という形式を採っている。その内容を検討すると、主想と関連づけた題をつけている作品（「魔れ行く音」「恐しい爪音」「たのしい響」など）が二三編、素材をそのまま文題とした作品（「時計の音」「チャルメラの音」「夜回りの音」など）が二編と、ほぼ同数である。

さらに、成績面から見ると、前者の題をつけた作品は比較的良好な評価を取め、後者の題の作品はふるわない結果となることが多い。

#### （2）記述の対象と素材

記述の対象の重点の置き方から分類してみると、「事件」を取り上げたものが二〇編、「景」を取り上げたものが一九編となっている。「事件」を取り扱う作品が多いのは、文題の性質がもたらしたものであろう。金子は、「年頃の女性は一般にロマンスに興味を持つ」からだろうと推察している。一方、「叙景」を取り扱う作品も決して少なくないのは、写生を重んじる時代的傾向を反映しているのだと考えられる。

「生活背景」つまり「文に描かれている舞台」としては、家庭と学校とが圧倒的に多い。寮生達は寄宿舎を舞台にした作文を書いている。当時は、生活に取材する傾向が強かったことを物語るものである。

「素材」としては、「深夜の物音」一三編、「夜回りの拍子木の音」九編、「半鐘の音」「風の音」各三編、「鐘の音」「鉄の音」「下駄の音」

13	12	11	10	9	8	7	⑥	⑤	④	③	②	①	No
おりんの音	音 恐ろしかった	清い音	思出の音	鉄の音	銀笛	竹刀の響	恐しかった音	失敗の音	たのしい響	大空の響	恐い爪音	廃れ行く音	文題
事件	事件	景	事件	事件	景	事件	事件	事件	景	景	事件	景	記述対象
家庭内	家庭内	家庭外	家庭外	学校	家庭外	社会	家庭内	家庭内	家庭外	社会	家庭内	家庭内	文の生活背景
主観	客主	客主	客観	主客	客主	客主	主客	客観	客主	客主	客観	客主	記述態度
仏壇のおりんの音	音 床下に入つて動く犬の	雪道を行く下駄の音	夕暮れの桑摘みの音	縫ひ直しの為に糸を解く時の鉄の音	銀笛の音	寒稽古の竹刀の音	兄のおどかし	活花の時の粗忽	羽根突きする音	飛行機のプロペラの音	小雀を捕つた猫	機織る音	素材
80	80	80	80	85	85	85	85	85	90	90	90	95	点評
N S	K T	K N	U E	N K	Y M	H R	E B	T K	S K	K B	O N	N G	生徒の姓

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	⑭ b	14 a
拍子木の音	時計の音	すさまじい響	音によつて	起床のベル	夜回りの音	こはかつた音	恐しかった音	夕をつぐる音	物凄き音	心地よき音 (未見)	音によつて	さざ波(詩)	さざ波
景	事件	事件	感想	事件	事件	事件	事件	景	事件	事件	事件	景	景
家庭外	家庭内	家庭内	家庭内	寄宿舎	寄宿舎	寄宿舎	学校内	学校帰途	社会	学校	家庭外		社会
客観	客観	主観	主観	主観	客主	客主	客主	客主	客主	客主	主観		客主
拍子木の音	夜きく時計の音	雷鳴	「音」といふ文の出来るまでの心理経過	起床のベルで元氣よく起きた朝	寄宿舎で眠られぬ夜の夜回りの音	冬、寄宿舎の夜半にきいた風の音	深夜のこはさ	鐘の音について思ふ	火事を知らせる半鐘の音	考查時間の物音	半鐘の音	さざ波の音	さざ波の音
70	70	70	70	70	70	70	70	70	75	80	80		80
K S	I S	Y B	S Z	E H	N N	A D	S N	S S	F K	M Y	I K	O K	O K



#### 四、生徒作文の実際

「起床のベルの音」「チャルメラの音」各二編等、同じ着想のものが多い。その他、「機（はた）の音」「桑摘みの音」「動物の相争ふ音」「鉛筆の走る音」「お蕎麦をよそふ音」「プロペラの音」「雷鳴」「おりんの音」「さざ波の音」「羽根つきの音」「竹刀の音」「銀笛」等が各一編である。

こうした分析を踏まえて、金子は次のような指摘をしている。発想・着想指導として注目すべき指摘である。

同一着想の多いもの程、凡作駄作が多く、独自のなもの程概して優秀作が多い。（中略）い、素材は、それ自身が已にすぐれてゐるから、素材の生地のみで、何ら表現上に妙案や新工夫を加へなくても、相当なものになつてゐるのに反し、ありふれた即ち多くの人から目ざされる素材は、余程構想や表現の上に新味を出すか、新工夫を凝らすかせぬ限り、見るべきものとならないからである。（傍点原文。前掲書、四六八頁）

#### （3）記述態度等

「純主観的描写」はほとんど無く、「客観的描写」が主で、主観的描写の随従しているもの」が、ほとんど全部を占めている。

構想の面からは、「一文の中にいろいろな音を書き込もうとする者」が多い。金子はこうした傾向に対して、「一事・一物精写細叙」の方へと進める必要があると指摘している。

この他、「段落毎に改行する」という基本的事項が身に付いていない生徒も存在する。特に低位の生徒ほどその傾向が強い。

未見の一編を除く全五〇編の作文を、評点順に掲げる。（評点の後の※印は、実地授業で紹介された作品である。仮名遣い及び圈点については原文のままとしたが、漢字は新字体に改めた。）

#### 《評点九五点》

##### 1 廃れ行く音（NG）95点※

数学の時間を前に控へて、私はそろばんをいぢつてゐた。小さい子供たちのよくする様に、がら／＼音をさせて喜んでゐた。が、ふと

「おや、何だか聞きおぼえのある……あつ、さう／＼、機（はた）を織る時のあの音にそっくりだ。」

かうして、そろばんをがら／＼させたことから、私はあの機を織る音をなつかしく思ひ出した。

小さい時から好きだつたあの音、どちらかといへば落着いたのどんな感じのする……平凡ではあるが、人の心をとらへる何ものかをあの音はもつてゐる。ごく／＼の田舎で、今もチンカラ／＼手織木綿を織つて自家用に役立てるところでは、機織も女の出来なくてはならない技芸の一つらしい。調子よく織つてゐる機の音を聞くと、姉さんかぶりの、頬をほ／＼と上気させて、赤いたすきもかひ／＼しく、手を動かし足をふんでゐる若い娘の姿がすぐ頭に浮ぶ。

だが、昨今ではもう殆ど機を織つてゐる音など、聞きたくとも聞かなくなつてしまつた。忙がしい文明の世の中は、大へんな時間のかかるあゝした悠長なものの存在することをゆるさないらしい。だからもう遠からぬうちに、自動車で逐はれた人力車のやうに、こんな幼稚な機械なんかは、日本のどこからも姿を消していくことであらう。

文明の利器に逐はれて廃れ行くものの、寂しさ痛ましさが其処にある。けれど私はせめて自分の耳にだけにでも、何時までもあの原始的な日本の音を残しておかう。今も今とて、うつとりと記憶をたどる私の耳にひびいて来るあの調子のよいのどかな音を。

## 【評】

一、天照大神このかた、女芸のうちでも最も大切なものの一つに思はれ、七夕まつりさへ行つて其の上達を祈つて来た、其の日本的な懐かしい機織る音が、だん／＼私どもの耳元から遠ざかつて行くことが、言はうやうもない素直な、こまやかな情で描かれてゐる。

二、私なんかも、あの水車のギーコトン、下駄のカラコロなどいふ懐かしい音楽と共に、この音の廃れ行くことをば、この文の作者以上に——と言ひたい位寂しく思ふ一人であることを告白したい。

三、題も氣が利いてゐるし構想もよし、文も亦この内容を語るに、誠にふさはしく出来てゐる佳作です。

## 《評点九〇点》

### 2 恐しい爪音 (ON) 90点※

もう何時かしら？ 私は編物に疲れた手を止めて、あのだゆまずカツチリ／＼とタイムを刻み行く時計を見つめた。妹はもう楽しい夢を結んだのか、すう／＼と微かな寝息が聞えてくる。

と縁側の方で、ばさばさといふ翼の音、それに引続いてカリ／＼といふ猫の恐しい爪音。しばらくしてはたと止んだと思ふと、又しても聞える恐しい爪音。こんなふうにして数回カリ／＼が繰返された。

一体何だらう？ 私はそつと立上つて、障子を静かに静かに明けた。淡い電灯の光をたよりに縁側を見渡すと、窓口のさんにすがりついてゐる小雀が一羽、それをねらつて居る猫。私はあわててかけよつたが、もうすでに遅く、猫の爪は小雀にと／＼いて居つた。猫は小雀をくはへるなり、素早く何処かに姿を消してしまつた。

あゝ、あの恐しい爪音、私の耳にはさほどでもない響に過ぎなかつたが、あの小雀にとつてはどんなに恐しい響に聞えたことだらう。私のはあの小雀がたまらなく可愛さうになり、再びそつと其の後を追つて見たが、あはれな犠牲者の姿はもうどこにも見出せなかつた。私は小雀に対して、心から死後の幸福を祈らずには居られなかつた。

折からお茶の間の柱時計が十時を報じた。外では秋雨がし／＼と降り続いて居る。

【評】評言の原文は不明。『智目と行足との新国語教授』に収載された生徒との応答記録から、「小雀を狙ふ猫の爪を研ぐ音が効果的に書き示されている。静—小動—大動—静—という組立てでもよく考えられている。作者の優しい心根の窺える文章である。」という趣旨の評で



あると推察される。

### 3 大空の響 (K B) 90点※

じつと見つめてゐると、ぐら／＼と目まひのしうな程、空のよくすみ渡つてゐる目だつた。空には何物も見えない。校舎の黒い屋根と青い空がくつきりと区別されてゐる。

ふと屋根のかげから一つ小さな姿があらはれた。飛行機だ。プロペラが日光にきら／＼とか／＼と。爆音をたてながら飛行機は徐々として空の中央に進んで来る。プロペラの響が晩秋の空をふるはせつゝ、何一つとして、障物のない青空を、空の征服者の如く、軽やかに進行する。

私は考へた。「こんなに自由にみえる飛行機でも、毎日今日のやうにおだやかな日はかりでなからうから、時には雨にもあふだらう。筑波おろしと戦ふこともあらう。」と。飛行機が一つ宙がへりを打つた。日光に銀のつばさがきらめく。急にあたりがひっそりしたかと思ふと、又忽ちがう／＼といふ響に變つた。

私はまた思ふ。「他の地ではめつたに見ることの出来ぬこの飛行機、聞くことの出来ぬこの響を、常々耳にし見ることの出来るこの地方は、何と恵まれた所であらう。同時に、この地に住む私達は、何と幸福なことであらう。」と。

飛行機は次第に彼方の空へと消えて行く、あの愉快な響を残して。

【評】作者のいふ通り、この土地の者でなくては、かういふ材料のあ

ざやかな観察が遂げられないであらう。記述の順序のよく整った名文の一つといつてよからう。

### 4 たのしい響 (S K) 90点※

「かちん、かちん」麗らかに晴れた日曜の午後、表の庭には、小さな子供達が四五人で面白さうに笑ひさめきながら、羽根突きをしてゐる。

空にはちぎれ雲があつちに一ひら、こつちに一ひらと他愛なさうに、ゆら／＼と漂つてゐる。午後の日和はいかにも楽しさう。

「正月門松、二月がは／＼、三月おひな……」

とうたひながら、かちん／＼といふ愛らしい響に合せて突いてゐるのは富美ちゃんだらう。

この和やかな日和に響く羽根の音のかちん／＼といふ羽根の音を聞くと、すぐ幼時の思ひ出が私の心の中にわき起つてきた。あの頃私もたま／＼売りにくる大黒様のやうなおぢいさんから、母にねだつて買つて貰つたものだつた。そして「出来もしないのに」と笑はれながら、散々いぢくり廻して突いてゐるうちに、どうかして羽根が羽子板の上に当るのが、たまらなくうれしかつた。

しばらくして、私は外へ出て見た。案の定そこには富美ちゃんが居た。押絵の羽子板が、羽根の宙に浮ぶ毎にちらり／＼と見える。

「かちん／＼」といふ羽根の音は、平凡な午後空気を振はして、いつまでもつゞいてゐる。

【評】羽根突きの音をきいて、幼時を思ひ、又再び眼前の写生にうつつてゐる所、大いにし。簡潔な中に頗る味がある。よく纏つた文です。

### 《評点八五点》

#### 5 失敗の音 (TK) 85点※

今まで私のお室で編物をしてゐた姉の姿がいつのまにか見えなくなつて、おふとんの上には幽ないびきをたてながら玉がのんびりと寝てゐた。姉が猫に化けた。まさか……読みさしの本を「バラ／＼」と今の氣味悪い考をうちけす為にい／＼も／＼くつた。

突然、隣の室から「チヨキン／＼」ときような鋏の音がきこえて来た。「あ、わかつた。お花の先生がおいでになつたのだな。それで姉はあちらへいつたのだな。」鋏の音によつて、姉の行方はやつとわかつた。

取り残された編物の上には日が強く照りつけてゐる。

今度は「ザイク／＼」と鋸の音。今日は私も活ける日なんだ。静かに襖を開けて中に入つて行つた。姉は今しんをたててゐる所であつた。私はまづおじぎをして自分の座についた。先生はなほも鋸で、もすこしで切りつくせる所を「ザイク／＼／＼」と切つていらつしやる。小さなうすい鋸がしなをつくりながら太い枝をえんりよゑしやくなく切つてゆく。やう／＼切りつくした枝は、先生が私の為にしんにせよと切つて下さつたのだ。

先生から受取つて、いろ／＼じやまな枝を切り払い、まづざつと出来たしんをはちなたててみようと、片手に鋏をもちわうちやくして片手でたてたので、鋏をガチャンと下におとしてしまつた。「アツ、ひくい声ではあるが、心のそこから出た声である。先生は「おや」とおやさしい顔に笑をおうかべになられた。姉は「そそつかしやだね。」とてもいふやうな眼をして、私をじつと見た。おもはぬ失策をしてしまつたと思ふと同時に、いそいで鋏を取上げようとして手をだすと、今度はしんの方を「バサ」とござの上におとしてしまつた。一度ならず二度までの失敗。

先生も姉も今度は声をだして笑つてしまつた。私は自分でもをかしくなつて、一緒に笑つてしまつた。「今日のお花はきつとよく出来ないにちがひない。」と思ひながらも又勇氣をふるつて又活けはじめた。玉が一人ぼつちになつて淋しくなつたのか、「ニヤーン」となきながら、入つて来た。

【評】「鋏の音」よりは、むしろ活花の時のしくじりといふ事を主想とした文だといつた方がより適切なのであるが、氣取らずに素直に筆がのび／＼とかけてゐる所がよい。猫の玉も前後に巧に照應して点出されてゐる。「題」はもう一工夫ありたい。

#### 6 恐しかつた音 (EB) 85点※

寒い／＼冬の夜、戸外には木枯が落葉をさら／＼と弄んでゐる頃、内ではこたつのまはりを囲んで、一心にお父さんのお顔を見つめてゐ

る。こたつの中の火はしきりにばち／＼と音をたててゐる。

「……といふわけで、あまりに可愛さうなので其のまゝにしてやつたとの新聞である。こんな田舎家でも余り安心は出来ないな。お前の後の戸が開いて、すうつと入つて来ないとも限らないからな」とからかふやうにお父さんがおつしやると、

「わあ、いやだ、いやだ、そんなお話もうやめ、」と弟がどなつた。

すると、丁度其の時雨戸がごんがた／＼といふ。「おや、今のお話がすぐ事実に表はれるのかしら。」と思つてゐると、変な含み声で、

「こら、こ、をすこし開けろ／＼。」

と来た。「それ」と皆一様に顔を見合せる。今にもとき／＼した刀をずぶりと畳につき立てて脅かし文句かな、あ、こはい／＼。まるで頭から冷水をかけられた様だ。

がら／＼と玄關の開いた音に、こたつに伏せてゐた青ざめた顔をあげてこは／＼ふり返つたら、何のことだ、兄さんが、にこ／＼笑ひながら入つて来るではないか。「まあ、お前は／＼。人をおどかす悪ふざけはもうおやめ。」とは、むきになつてたしなめる母の声。

「おや／＼、これは失敬。来る早々お目玉か。」と頭をかく兄さん。「おどかしたかはりにお土産おくれ。」と弟にいはれて、「ほーら、おどかし賃」と言つて、どたりと風呂敷包を投げ出した。

お母さんが包をほどきかけると、すみの方から、ころ／＼と赤いお

いしさうな林檎が一つころげ出す、つゞいて幾つも／＼……。

「これはおいしさうだ、どれ、一つ先陣をうけたまはらうかな。」と言つたが早いか、お父さんは、中でもおいしさうなのを、一つ大きな掌でつかみ上げ、次の瞬間にはもう赤いところを一口がぶり。

つい今しがたの恐しさや腹立たしさのすつかりなほつた皆は、にこ／＼しながらそれ／＼口を動かしてゐる。

戸外では、またも一しきりさら／＼と木枯が吹きまくつて行く。

【評】達文達筆、文中にみなぎる滑稽味に、思はず明るい朗らかさも感じさせられる作。まるでお芝居でも見てゐるやうに、気持ちよく読まれる文です。

## 7 竹刀の響(HR) 85点

「行つて参ります。」「お体に氣をつけて行つてらつしやい。」といふいつもながらの慈母の声を後に、門の外に出た。筑波山は雪をいたゞいて吹く風も氷の様に寒い。近辺は静かである——何の音もしない。先に二三人の人が足駄の音高く通つたり、人一人通らない。凍つた土の上には自転車、趾荷車の趾や下駄の趾が昨日の活動の趾を残してゐる。

コツ／＼と靴の音を立てながら、からたちの荊の生えてゐる土手を左へ曲る。と鶏がコケコツコと鳴く、声が微かに聞えた。何処の家かで雨戸を開ける音が重さうに聞える。今まで奥山のように静かであつた此の平和な村も、今は眠りより覚めようとして居る。朝起きる駄菓子

屋の家ではガタ／＼と、立てつけの悪い戸を開る音がしたと、太つた

をばさんが半分白鬚の混つた頭を出した。私の姿を見ると眠むさうな目をパチ／＼させながら「早いね！」と言って真黒の齒を出して、ニツコリと笑つた。私も大きな声で「をばさんお早う。」と言つた。しばらく行くと野原路へ出た。寒い風が一層ひどく吹く。私は帽子を深く被り、オーバに身を包んで下を向いて歩く。霜柱が、歩く度に、サクリ／＼と淡い音を立てゝゐる。私は其の音を面白さうに聞きながら行くと、突然「エーオー」といふ声と共に何かをはたき合ふ音がする。私は何んだらうと立ち止つた。大穂村から常も来る郵便屋さんが折好く通りかゝつたので、「あの音、何んの音だか知つて居りますか？」と聞くと、親切に「あゝあの音ですか、寒稽古の音ですよ。」とお教へ下さる。寒稽古、此の寒い日に襦袢一枚になつて体をきたへてゐる有様が目にうかぶ。又「エーオー」と腹の底からしみ渡る様な其の掛声、竹刀の音は、つゞけ様に聞える。

と私の頭をさつと通り過ぎた言葉がある。「鍛錬せよ／＼、寒さに負けるな。」と今度聞えて来るのはあの勇ましい掛声でなく、厳かな神の御教の様に「鍛錬せよ／＼」とのみ。

一歩進めば尚大きく、二歩進めば尚々大きくおごそかに聞えて来る。病弱の私にはどの位此の無言の御教えが心の底にしみ渡つた事でせう。

× ×

白々と明け離れたさわやかな朝。強き太陽の日を全身に浴びて、心行くばかり両手を広げて深呼吸をしたならば、何んなによい気持だら

う。早くやつて見たい！

又もおごそかに鍛錬せよと。

【評】非常に、のつた文である。後半はない方が却つてさつぱりとしていい。作者が何処へ行かうとしてゐるか、不明なので、何だか物足りない気がする。

## 8 銀笛 (Y M) 85点 (一月二〇日作)

「兎が餅を搗くと言ふ月の世界に行つたらば。」幼い妹は紅葉の様な手を振り／＼一心にうたつてゐる。何時の間に二人は小高い岡の上になつて居た。十五夜の月はかう／＼として今宵の暗を照して居る。足下の草むらからはデミイ／＼と消え入る様なこほろぎの声。そよ風に枯れた穂薄が、さや／＼とゆれる。遠くで犬の遠吠えが微かに聞えてくる。

目の下には見渡す限りの田、畑、岡、その中に白く帯の如くに横たはる小貝川、すぐ近くのは中に、ある水車場では「ゴト／＼」と水車の回る音。大空の北隅にくつきりと輪画をあらはした浅元山、其れに連る雪入山。其のふもとの霞たなびく中に点々として散在する村落の灯。ああ、あのうちには我が家の灯もまじつて居るのだ。何処かで、はつたん／＼と杵の音。あれも月へ供へる為の餅であらう。遠くの町へでも行つて遅くなつたらしくすぐ下のだら／＼坂をガタゴトと荷馬車が下りて行つたが、やがて黒い杉森の中へと吸ひ込まれてしまつた。

ふと何処からともなくほろ／＼と言ふ銀笛の音が流れて来た。「あ、

銀笛の音が……」と言ひながら思はず耳を傾けた。妹も何時しかうたを已めて私の袂をしつかり握つて居た。「たい誰が吹き鳴らすのであらうか？ きつと枯芝の土手にでも腰掛けて月に向つて吹いて居るに違ひない。」などと想像をめぐらしながら尚も耳を傾けた。むせぶが如き笛の音は或は高く、或は低く、強く、弱く、いつまでも聞えて来る。私はただ、呆然として、さんくくと降り注ぐ月光を浴びながら時の過つのも知らずに立ちつくして居た。

【評】大体ととのつた文であり、主想もはつきり読まれるが、前半にあんまり「音のいろく」をこたくと出しすぎて居る。

## 9 鉄の音 (NK) 85点

「何処までやつたの」

といふ声にはつとして手早く、裁縫物を取りだした。

「袖付をへたところよ。見て戴かない。でも……」

といったきそれ以上には、何も発しなかつた。今日も又か……と思へば、あのいやな鉄の音を連想する。

今日も又赤茶色にさびた鉄のごやつかに。チヨキン、チヨキンといふあのいやな鉄の音。いつの間にか袖のとめは可愛さうに、ちぎられてしまつた。チヨキンといふ一瞬間のいやな音のために。あの音はどんなに、私にとつてはこはいのであるか、自分でも知らない。其れもみな自分の下手のために、ちぎられてしまつたのだと思へば、どうしてあの音を……。

第三時間目の終りを知らせるベルの音は、八百余の生徒の耳にひびき渡つた。運動場の方からは皆の口から連発する寒さの批評。木枯の盛んに吹きすさぶ音、電線のうなる音。それらが一緒に、つて前より、更に強く私のすざましい心を、笑ふかのやうに。強く強く吹きすさぶ。

【評】短い小品であるが、少女でなくては、否この苦しい体験の持主である人でなくては書けぬ文。その点がうれしい。

## 《評点八〇点》

### 10 思出の音 (UE) 80点

真赤な太陽はいつの間にか筑波山の後に姿をかくしてしまつた。家々より立上る煙はゆるやかに、白い一筋を画いて空の彼方に消えて行つた。鳥がカア／＼鳴きながら、ねぐらをさして飛んで行く。無邪気な子供等は、「夕焼小焼、あした天気になあれ」と歌ひながら、母様の待つてゐるであらう楽しい我が家へと歸つていつてしまつた。私とお母さんは一生懸命に摘み続けた。大きなざるも早半分以上になつた。あたりはひっそりしてゐて、ポチポチと云ふ桑摘む音ばかりが、あたりの薄暗い空気をやぶつて聞こえる。

お隣りのお婆さんは、曲がつた腰に籠を背負つて、先程歸つて行つた。

彼方の家々には赤い灯火がついた。暮色は静かな山村を黒いとはりて刻一刻と掩ひ始めた。と急に賑かな笑ひ声が起つた。私もお母さんも同時に其の方を向いた。其処には、鉄をかついだ三人の男のひと、

籠を背負つた三四人の女のとが、面白さうに語ひながら家路にと歸つて行くのであつた。私とお母さんは顔を見合せて、何とはなしに微笑し合つた。

「もうそろ／＼歸らうよ、さるも一ぱいになつたから……。」「え、……。でももう少し……。」「おや、今日は馬鹿に熱心なこと。いつもこんなだといんだがね。」とお母様はおつしやつてお笑ひになつた。あたりはみんな薄墨色、其の中に桑摘む音ばかりがポチ／＼／＼／＼と……。

或る夏の一日の桑つみ。あの音！ 思出の音！ 又今年も夏になつたら桑摘みをしよう。あのポチ／＼と云ふ音には、何となくなつかしい、そして淋しい響きがこもつてゐるやうに感じられてならない。

【評】平和に暮れ行く桑畑に立つ母子。其の手の先から囁き出るポチ／＼と云ふさゝ音、田園文学の一つとして興味深いもの。時間の推移が大体よく進んでゐる。

## 11 清い音（KN） 80点

月が美しい光で、あらゆる物を照し、やさしい静かな歩みを続け、雪が見渡す限り白砂のやうに光つてゐる夜、私はお母様と一緒に、お使いから歸つて来た。

静かな夜に下駄の音だけが、つめたい雪の上に、さくつと、さくつと、清らかな気持のよい音を、ひ／＼かせてゐる。

「お母様。此の雪何尺位あるでせうか。」さうね。八尺位でせう。」

お母様はしみりと話された。

下駄の音は相かはらず、さくつと、さくつと、ひ／＼き、此の清らかな音は、私の全身にしみ込み、心まで清らかに、いれかへられたやうな気がした。それとも此の音で、よい方にみちびかれるのではないか。私は急にうれしくなつた。

森の彼方には、寒むさうなふくろふの鳴き声が聞える。

【評】「途上所感」といつたやうな断片的叙景抒情であるが、引きしまつてゐてよい。中心がはつきりしてゐる。

## 12 恐ろしかつた音（KT） 80点（二月二日作）

不図目が覚めた。辺は物凄く静で、たゞ寢息のみ辺の沈黙を破つて聞えるだけである。あまりの静けさに、私は恐ろしくなつてしまつて、すつぽり頭から夜具をかぶつてしまつた。

もし泥棒が入つたらどう仕様などと考へ出して、尚恐ろしくなつてしまつた。そして新聞にあつた強盗の記事を思ひ出したりした。

すると突然縁側の下辺でこそ／＼と音がした。私は頭から冷水をかけられた様にぞつとした。いよ／＼泥棒が入つたに違ひないと一人ぎめしてしまつた。

私の胸は恐ろしさの為、早鐘を打ち、手足はぶる／＼ふるへた。傍の母を起そうと思つて居ると、まもなく止んでしまつたのでまづ少し安心して居た。すると又音がし始めた。しばらく経つと又止み、そんな事が数回あつた。終ひには馴れてしまつてそんなに恐ろしくもなく

なつた。しばらく経つと今度は床下へ入つて来る様な気配である。さつきの安心なんか何処へか飛び去つてしまつた。私は息を殺して、ちいつと耳をそばだて、居た。すると何んだか私の寝て居るすぐ下に来た様な気がする。私は家の人を起すのも忘れて、神に念じながら、ぶる／＼ふるへて居た。床板をたたく様な音がする。きつと床板を破つて畳を上げ覆面した頭でも出るのだらうと、さう思ひながら夢中でふるへて居た。

もう畳を上げる頃だと思ふ時分に、突然畳を上げる音とは違つた大の首輪の音がした。あゝ、其の時の嬉しさ……………。

【評】だん／＼と事件の頂点へ引つぱつて行く手腕は、なか／＼にすぐれたものだ。「何かしら／＼」と思はせられながら、読者は固唾をのみつつ、読み進ませられて行く。

### 13 おりんの音 (NS) 80点

目覚し時計の響に楽しき夢は破られ、私は登校の支度にと急いだ。世は未だ夜のとばりに包まれ、人々は安らかなる夢を貪り、辺はしんとして時々彼方にて鶏の時を告ぐるのと、女中の食事の用意をする音のみが聞えて来るばかりである。

やがて登校の支度は出来、御仏前へ初穂を上げるのに、其の前へ立ち、小石川に住める祖母より戴いた、二寸程の可愛い、蠟燭にお灯明をともし、亡き兄の友より贈られた香よきお線香を上げ、私はおりんを叩いた。『チーン』何と清き音なのだらう。

兄様はきつと楽しい／＼地下にて、毎日兄様の亡くなつてからは淋く過す私の叩くおりんを、故郷からのお便として、喜んで聞いて下さるだらう。それから私の生れない時分に永久に帰りまさぬ途につかれた姉、又私の七才の時地下に旅立つた婆や、皆誰もが喜んで聞いて下さるだらうきつと／＼。

私はお祈りをして亦一つ『チーン』。本当に何と清らかな音のだらう。おりんは極楽浄土へでも響いて行くかの如く、長くそして静に静に消えていく。

【評】これは珍しい題だ。まだ／＼十分練るところはあるが、とにかくまとまつて居る点が良い。「チーン」たしかに清さがこもつてゐるやうだ。

### 14 a さざ波 (OK) 80点 (一月二日作)

ひたひた／＼と囁くやうに、さざ波が寄せては返してゐる。静かに寄せてくる波に送られてそよ風がさあつと、二人の黒髪をなぶる。はるか海の彼方は真赤な夕日に色彩られて、あたり一面ぼうつと、淡桃色に、恥ぢらひし乙女の頬の様に。

「たあちゃん、もう少し居ませうよ。」「ええ、では夕日が沈むまでね。」私はうなづいた。そして、貪る様に夕日を眺めた。銀色のさざ波が、真赤な夕日を受けて金色に、銀色にきらきら光つて見えた。

私はいつか波打際まで来て居た事に気づいた。遠くにほんやりと松林が見える。今迄砂浜に遊んで居た三人は今ではもう影も見えない。



時折ひた／＼と寄せて来る波の音は、浜の子供達にとつて、よき子守歌であらう。又、日に歩み夕べに宿を訪ねてさすらひ歩いてゐた人が秋の夕べに砂浜を訪れて、あの波の音を聞いたならば、あてもない身の便さが一層強く心を打つであらう。一族して海辺に避暑に来た人等には、人の心を淋しくさせるあの音もどんなに楽しく聞える事であらう。

【評】これは他の人の見つけない世界を描いてある。文もかなりに練られてある。「さざ波」のさらり／＼の清くしめやかな音にふさはしいよい文。

ひたひたと さざ波が  
寄せては返す さつさり。

はるか彼方を眺むれば  
夕日の色も映え映えと  
銀の波間に黄金色。  
さびしく楽しくさ、やくやうに

【評】時折 かういう形をとつて表はして見る事もよいでせう。變つた面白いものが出来るものです。素材がよしや有りふれたものでも、かう言ふ形の、新奇なりズムのある言葉にのせると、相應によみこたへがして来るものですから。（以上は、金子が授業時に添えたコメントである。―引用者注）

「今晚は随分早いね。」と傍に縫物をしてゐた母に言つた、と月出里が火事だ、月出里が火事だ、といふ力二つばいの叫。

父は早速支度した。

はんしやうは尚も私共の注意をうながすかのやうに激しく鳴つてゐ



た。木枯しは尚もがたんごとんと鳴らした。

父は急ぎ足に出て行つた。

はんしやうの響をまぎらすために、ラヂヲを耳に当てた。前にはたのしく聞えた唱歌も今はおびえた声のやうにかすかに聞えた。

はんしやうの恐ろしい響はうすらがうともしなかつた。

同じ音を聞くのでありながら聞く人の心によつて違ふと言ふことを感じさせられた。

ふと何時か学校で習つた、心此処にあらざれば見て見えず聞いて聞えずと言ふことを思へ心の中で二三度くり返した。

さうして少しですむやうにと祈つた。

【評】半鐘の音でおびえてゐる心持がはつきりと読める。所々にひりつとする語句がひそめられてゐる。

## 16 心地よき音 (MY) 80点

\* 作品不明 (現存せず)。

## 《評点七五点》

## 17 物凄き音 (FK) 75点

たしか四年前の二月十日の夜だつたと記憶して居る。私は半鐘の音にふと目をさました。そして起きる事も出来ず、がた／＼ふるへながら、夜の静さをやぶつて物凄く聞えてくる半鐘の音をきいて居るほからはなかつた。

すると母様が来て私の目をさましてゐるのを見て、火事は遠いのですから安心しておねなさい、と言つたのでおもはず、「どこ火事はどこなど」と言ふと、さあ多分富多でしようよ、すこしも火が見えないのですからと言つたまゝ、部屋を出て行つてしまいました。

しかしいくらねようとしてもねつたけなかつた。其の中に火も消えたのだらう、半鐘の音も聞えなくなつた。その時のおそろしさあの物凄く半鐘の響とはいつになつたら私の心からきえさる事であらう。

【評】おびえてゐる其の夜の氣持がはつきりと描き出されてゐる。

## 《評点七〇点》

## 18 タをつぐる音 (SS) 70点 (一月二三日作)

学校の帰途のことである。西の空は真赤となり、明日の幸福を知らせるが如く。

利根川のきてきの音。鳥の巣にとびかへる羽ばたきの音のみが、ひびきわたり、あたりは静かである。

すると、いつしか、四方の森々からは、さびしい鐘の音がひびいて来る。その鐘はきつと、おぼうさんが、つくのであらう。あの鐘楼にさがつてゐる、大きな黒い鐘。音は鐘楼にもれ、森にひびきて、だん／＼とひびき、やがて、私共の耳に、きこえる、あの鐘は、なんとさびしさ、あはれさを、感じさせるものであらう。

鐘の音と共に、広大なる田畑で、一日たんせいに、働いて、家にかへる、人々は、鋤を持ち、或は、かこをおほひ、夕やけを、浴びなが

ら、細い野道を、しよぼ／＼と帰へるにふさわしき音である。私には、あの鐘の音が、にぎやかな都会に、もれるよりは、静かな農村に響き渡るの、なんと心の、おちつきを、よくすることで、あらうと、思はれる。

私には四季の鐘のうちで、秋の鐘は、最も味ひ深く聞れる。

【評】一貫した筋もなく中心もはつきりしてゐないし印象力がうすい。

## 19 恐しかった音 (S N) 70 点

悪者に追ひつめられ、千丈の谷底へ、危く落ちる瞬間、はつとして目がさめる。胸がどき／＼と、波を打つ。体には汗びつしより。あゝよかつた。今のは夢だったのか、本当に恐ろしかった、等と考へて居ると、突然私の耳に、異様な物音が聞えた。はつとして耳をすますと、何処かで、コトン／＼／＼と言ふ、ただならぬ音、私は聞くやいなや、もう無我夢中で蒲団の中へ、もぐり込んだ。前よりも、もつと／＼十倍も二十倍もの鼓動が加はつて、まるで、お部屋が上つたり下つたりする様に感じた。息を殺して、じゝとして居る事、五分位、苦しいの、苦しくないのつて話にならない。静に心を落着けて見ると、何の音もしない。耳のせみだつたかも知れない。恐る／＼頭を出して、目を開いて見ると、ガラス窓が、ほんのりと明るい。何時だろう。まだ夜明ではないらしい。しーんとした中に、唯、かすかに、かすかに、お友達の寝息のみが聞えるばかりと、カタン／＼チュウ／＼と言ふ天

井を走るねずみの音、なあーんださつきのはねずみのいたづらする音だつたのだ。馬鹿／＼しい。つまらない事に、大事な睡眠時を費やしてしまつた。なんて臆病なんだらう、もつと／＼大きな心を持たねばならない。

今までした事をかしくなつた。静けさを破つて、ザン／＼と二時を打つた。おや二時、急に淋しくなつた。眠らう／＼とあせつたがなか／＼眠れない。皮肉にも天井で、ねずみマラソンの音のみが、眠を妨げる。何時の間にかそれもやんで、再び深い眠に入つた。

【評】中々達者な筆だが、まだ／＼才に任せて書きばなしただけで推敲が加つてないので、もう一息といふ所でつかへてゐる。

## 20 こはかつた音 (A D) 70 点 (二月二〇日作)

冬の夜はしん／＼と更けて行く。何所のお部屋もひっそりと静まりかへつて、聞えるものはかすかないびきだけ。

何時だらう、早く眠らなければ……

あせればあせる程目が冴えて、なか／＼寝つかれない。遠くの方から、チャリン／＼といふ音が聞えて来る、多分夜回りであらう。この夜中ずみ分寒いことであらう。然しこれは誰もがしなければならぬことで、町の為否、自分の為になるのだ。チャリン、お、夜回りはすぐ近くまで来たのか、然し間もなく遠い暗に消えてしまつた。

家では父母は今頃眠りに就かれたであらうか、それとも今の自分のやうに、目をさまして居られるであらうか。家に居たならば、今頃は

暖かい両親の側で、安らかな夢を続けてゐたかもしれない。あゝ、家  
がこひしい。父母のそばがなつかしい。家へ帰りたい。いゝ、やいけな  
い、これが修養なのだ。誰の為でもない、皆自分の為なのだ。そんな  
心を起してはいけない。二つの心は互に、相争ひながら、今や、関が原と  
なりかゝつた。

「ガタン」音と一緒に、私の体は床の中にもぐり込んで、蒲団をか  
たく／＼にぎりしめた。誰でもよいから、早く目を覚ましてくれれば  
よい。それにしても今の音は一体なんだらう。しばらく耳をかたむけ  
てゐたが、何の音も聞えて来ない。又ガタン、なんだ風の音だ、なん  
といふ自分はおくびよう者なのだらう。後はなんの音も聞えて来ない。  
寮舎の夜は静かに更けて行く。私も漸くまどろんで来て、僅かのう  
ちに眠りの国へ入つた。

【評】眠れぬ夜の風の音、学校は単独であるが、「父母こひし、我が  
家なつかし」の一節に、寄宿生らしさが色濃く匂つてゐる。

## 21 夜回りの音 (N N) 70点

眠らう／＼とあせればあせるほど、目は冴えてしまひます。どうし  
てこんなだらう。昨夜はあんなに早く眠つてしまつたのに……。自分  
を叱りつけながら、だん／＼いら／＼してしまひます。お友達はあんなに  
すや／＼と眠つてゐるのに、私だけとは思ふと悲しくなつて、遠  
く離れた故郷のことなどを思ひだし、父母は今頃安らかに夢路を訪つ  
てゐるだらう。可愛い妹は今頃どうしてゐるだらうなどと想像して

ゐますと、ガヂヤン／＼と云ふ音が夜の空気をふるはせて、さびしく  
聞えて参ります。何かしら、今まで私の胸は早鐘をうつやうにい  
ら／＼してゐた心は、恐怖心に変つてしまひました。

次の瞬間、あゝ、あれは夜回りの音だと気付いた時、ホツト安心しま  
した。あのガヂヤン／＼と云ふ音は、何か私の心をいろいろの思ひに  
ふけらせるのであります。先刻より冴えてゐた目は一層冴えて、どう  
しても眠ることが出来ません。夜回りをする人はさぞ寒いことせう。  
あれは私達のために犠牲になつてしてくださるのだと思ふと、感謝の  
念を表さずにはゐられなくなります。夜回りの音は次第々々にうすら  
いで、いつしか闇の中へと消え失せてしまひました。

やがて時計は十一時を報じました。窓の方を見ると月光が曇ガラス  
より射し込んで、部屋は薄明くなつてゐます。何んだか気味悪くなつ  
て床の中へ身をかがめ、何時しか眠りについてしまひました。

【評】よくある材料である。大体無難ではあるが、これぞといふ新味  
はない。

## 22 起床のベル (E H) 70点

ザリ／＼／＼／＼、私がハツと目を覚ました時、盛に起床のベルがな  
つてゐる。私はその前から、かすかに、ベルがなつてゐるなと思つて  
ゐた。ザリ／＼／＼それだのにまだなつてゐる。私はそれを聞いてゐ  
る中に、心の中であうさげんだ。おゝ、ベルがなつてゐる。私達は今、  
修養の身であることを忘れてはならない。あのベルは、私達が今日一

日、その修養の道に向つて進んで行くやうにと、さとしてゐるのだ。と、同時に私の胸は、よろこびで一ぱいになった。ザリ／＼ザリー余韻はまさに、消えようとしてゐる。私はそれが消えない中にと思つて、飛び起きた。そして、手早くふとんをたゝんだ。いままでなら、「寒くていやだなー」などと思つて、半分だけ起き、ふとんの中に手を入れて、あたゝめたりしてゐるのだが、今朝に限つて、そんなことをするのは、時が惜しくてやれなかつた。髪を結つて、着物を着た。それも、今までのやうに、ひまどつてはゐなかつた。

顔を洗つて、お部屋に帰つてきた時は、皆洗面所に行つた後で、しんとしてゐた。開放された窓から、冷たい風が流れて来て、頬をなでた。私の心は、一層ひきしまつてゐた。私は机に向つた。これまでにない、勇みたつた、晴々とした心で。

【評】殊勝な心掛が、いつもはいやなベルの音を進軍喇叭の音をきいたといふところ。心の持ちやうといふものが、如何に私どもの生活に關係するかを語る作。

### 23 音によつて (S Z) 70点 (一月二日作)

「カツチン／＼」時計のセコンドの音が、静かに家の中に淋しげにひびいてゐる。

火曜日までに書いて行かなければならない。

さうだこれを題にして書いてやらう。私は机にしがみついて、しばらくは紙にとらめつこをしてゐた。中々浮び出ない。音なんて先生は

なんてくどい題をお出しになるのだらう。

私はあせるばかりである。

「時計の音じやだめだ。」別の音にしよう。とした時、天井裏でねづみの走る音。お、さうだ。あの音がいい。私は一人胸に問ひ胸に答へて、じつと天井裏の音に聞耳をそばたてたが、いくらまつても何の音もしない。五分。十分。十五分。何の音も聞えない。

私は持前の気短さが、むら／＼と燃え上つて来さうなのをじつとこらへて、天井裏の音の起るのを、今やおそしと待つてゐた。

やがて天井裏が急にさわがしくなつた。私は飛立つ嬉しさを、じつとこらへて、天井裏の音に聞きいつた。

「ガタ／＼チウ／＼チウ／＼ガタ／＼。」とつづけざまにいたが、又もとの静けさにかへつた。

「まあ馬鹿らしい。」私は持前の気短さがそろ／＼尾を持ち上げて来た。

「エ、面倒くさい。」私は机の上にあつたインキ瓶や、本や、今まで使つてゐたペンまでもかたづけしてしまつた。

家の中はひつそりとしてゐる。かすかに犬の遠吠が聞える。一人しく／＼泣きながら床に入つたが、いつしか楽しい夢路をたどつた。

【評】この文が出来るまでの苦心談であるが、作者の性質だけはよく出てゐるが、材料があまりよくこなせてない。読み直しが大切。

### 24 すさまじい響 (Y B) 70点

今までのからりと晴れ渡つて居た大空が、俄に曇つて来た。と同時に車軸を流すやうな大雨が、ざつと降つて来た。雷はビカ／＼と閃き、雷はゴロ／＼ズドンとすさまじい響を立て、鳴り出した。私は恐しくて／＼たまらないので、前の畑へ一目散に走つて行つて、桑枝を一枝折つて来て、柱にさした。

そして皆して、寢床に蚊帳をつゝて入り込んだ。老人達は一生懸命お線香を上げたり、火をたいたりする等、上を下への大騒である。私が一番家中での恐ろしがりやである。蚊帳の中から外を見て居るとピカ／＼と光る。光つたかと思ふと間もなく、ゴロ／＼ズドンと大きな音を立て、鳴り響いた。あゝ何とすさまじい響きだらう…………。忠男は耳を押へ妹も耳を押へ、私は蚊帳の隅の方にじつと座つて居た。間もなく家の中がまつ光りになつたと思ふと、地震の如く天地もとゞろくばかりの大きい／＼音を立て、鳴り出した。まあ何と恐ろしい音だらう。側に居つた父が「今はきつと落ちたに違ひない。もう直に雷様もお通りになるだらう」と仰やつた。やがて電も通り過ぎ、雨も止んで、大空には美しい虹があらはれた。雨に洗はれた庭木には、処々銀のやうな玉が光り、裏山では蟬がやかましく鳴き出した。

【評】雷鳴を描いたのは、この級では珍しいが、何だかもういき深く考へて、この人ならではのかけないやうな方面もさし加へてほしいと思ふ。大体無難であるが、しかしまだ印象力はうすい。

25 時計の音 (I S) 70点 (一月二〇日作)

あたり一面は、夜の眠りについてしまひ、今まできら／＼と光り輝いてゐた太陽は、いつしか西の山に入つてしまつた。空にはほんやりと星がきらめいてゐる。弟達も昼の遊びにつかれてぐつりと寝こんでゐる。あたりは物凄く程しんと静まりかへてゐて、時計の音だけがカツケン／＼と時をしらせてゐる。私には其の時計の音が大きな／＼風かのやうに、頭にひびく。表を通る人の足音が、時々から／＼と夜の静けさを破る。

ふと、時計を見るといまや十時を報ぜんとしてゐる所。近所では云ひあはせたやうに雨戸を閉る音が、がたん／＼と聞えて来る。遠くの方では、わんたん屋の笛の音がヒューヒューと、ときれ／＼にきこえる。其の笛の音がだん／＼近に聞えて来る。がら／＼、がら／＼と車の音がすると、又ヒューヒューと淋しげに吹きながら遠くへと行つてしまつた。

時計はなをもカツチンカツチン眠さをも忘れて一心に働いてゐる。寝ようとしても、あたりの静けさに目はいよ／＼冴えて来てな／＼ねむれない。いつしか深いねむりに入りつてしまつた。又もや時計の音は、私の耳にカツチン／＼とかすかに聞えて来る。その時、私は、私も時計のやうに勤勉家であるやうに祈つた。

【評】所々に新鮮な描写があるが、全体としてあまり／＼とく／＼並べ過ぎてゐるやうに思はれる。

26 拍子木の音 (K S) 70点 (二月二四日作)

あたりはすべてのものが、深いやすらかなぬむりに就いた静かな夜、  
物事は何にも聞えず只部屋の置時計だけが、忠実に「カチカチ」と、  
時をきざんで行く。……

折しも、辻角の方でかすかな、拍子木の音が、「チヨキチヨキくく」と聞える。よく耳を澄まして聞いて居ると、自分の家の方へ近づいて来る。静かなく夜に、一種言ひやうのない、きりつとした拍子木の音を、私はなつかしさを、持つて毎晩迎へた。そしてその音を聞いて、安心して寝るのでした。拍子木の音は、だんくはつきりと、強く響いて来た。よく数へて見ると、十二打つた。あつもう十二時になったのかしら、時のたつのは、早いものと、わずかな間に、私は痛切に感じた。この「チヨキチヨキくく」といふ拍子木の音によつて、町内全体の人々が、高い枕をして、毎晩ゆつくり寝る事が出来るのである。この小さな拍子木の音によつて、毎晩無事に過して行くのだ。さう思ふと、有難さが、身にしみて聞えて来る。音は益々はつきり、冴え渡つて来る。私はもしか神様が、おならしになつていらつしやるのかと、思ふ程神々しく聞いた。その音は、だんく小さくなつて、何処ともなく消えさつて終つた。けれど私の頭には、「チヨキチヨキくく」といふ拍子木の音がはつきり浮んで居る。

あたりは、前より一層静かになり、部屋では皆が気持よささうに、ぐうぐうと寝て居る。相変らず置時計の「カチカチ」が止まなかつた。  
【評】数多い拍子木の文の中では、まづ良い方の作であらう。「消え去つてしまつた」あとの余韻が耳について居るところが面白い。

## 27 うれしい音 (KR) 70点

今まで、まばゆい程輝てゐた秋の日も、つかれを覚えたらしくほつしようとする時、突然空が曇つて来て瞬く間にものすごい形そうになつて来た。「風かしら」と思つてきよつとした。と見る間にゴーツと風がうなつて来たかと思ふとザアーツと大粒の雨が降つて来た。

夕飯をすました頃はもう本当の風になつてしまつて、ゴーツと吹いて来ると家がミシくする。側を見ると、弟は何もしらないかのやうにすやくぬむつて居る。其の側には姉が心配そうな顔をしてやはり弟の顔を見て居る。今頃母は自分の里で、何にも知らずに母と共にいろくの世間話をして居るであらう。父は先程用事があつて外出したが、何んでも仕事が忙しいやうな話をして居たから多分今晩は帰らぬかも知れぬ。ああせめて母なりともゐて下さつたら。私は此の時始めて親の有難さを感じた。

「姉さん。お父さん帰つて来るでせうか。」「さあ此の風だからね。」しばらく沈黙が続いた。ただ聞えるのは風の音と、其れにまじつて降る雨の音と、木のすれ合ふ音ばかりである。

それから何時間たつたらう。門の方で雨の音にさへぎられてよく聞えないが、たしかに人の歩く足駄の音がする。普通の私であつたら聞えなかつたらうが、父を待ちこがれて居る私の耳には強く響いた。玄関に行く、と、びしよぬれになつたまぎれもない父の姿であつた。「あらお父さん。」姉さへ来ないであらうと思つたのに。此の時私の耳には何物も聞えなかつたうれしさで心がいつぱいであつた。今までの恐ろし

さなど忘れてしまつて。

【評】「足駄の音」をこれほどなつかしんだ心持がうれしい。

28 さびしい音 (FJ) 70点

気味悪い夢にふと目をさました。時計は間もなくデーンと一つ打つた。そうして又カツチン／＼と動いて居る音が聞える。四辺は薄暗く、中廊下には電灯が白く黄色くかすんだ中に、鈍い光を放つて居る。時々誰のかわからない寝息がすう／＼と聞える。鼠が裏板の上を走り回る。静まり返つた夜半には、その音が物すごい程大きく聞えた。

私はあまりの淋しさに、お友達を呼び起さうと思つたけれども、あまりよく眠つて居るらしいので起すのも氣の毒と思ひ、こらへて居た。ガラス戸が時々がたん／＼といふ音を立てる。チャキ／＼といふ拍子木の音が聞えて来た。その音が如何にも寒さうに聞える。

淋しい……淋しい……私の心はこの言葉にみたされた。

外は今夜は寒いだらう。木枯の吹く音がビュウ／＼とぎれ／＼に聞えて来る。夜回りの爺さんは眠れるだらうか。こんな寒い夜を歩いて……。

チャキ／＼またしても拍子木の音が聞える。何といふ静かな寂しい音だらう。

【評】平凡な題材、平凡な叙述だが、素直なところがよい。

29 待遠しかった音 (MH) 70点

冬の夜は静に／＼更けて行きます。あたりはひつそりとしてたまに聞えるのは、ごうごうと言ふ音ばかりである。今は人は一人ぼっちで留守居番をしなければならぬ。それでなくても淋しい冬の夜の二時頃、ねむらう／＼と思つてもねむられない。折しも、ガツタリ、すはともぐり込でしばらくたつてからそつくりのぞいてみて、それが、徒らなねずみの仕業と知つた時、ああよかつたと、思つたが、なんとなく恐し／＼しやうがない。来まいか／＼と考へる時はよけいに、恐しい事が次から次へと思ひ出されてもうかなしくて泣きたくなつた程であつた。

恐しき二番目の音は又も、家のすみ／＼までびびき渡つた。「今度こそ。」と力いづばい臭をこらしてゐる。其の時心は例えようとしたとて、とても／＼上げる事は出来ない。すると、「ニヤーニヤー」と、うす気味悪い猫の声。

「まあ。」今度もか。私の心はどうしてこんなにいちけてゐるのだらう。どうしたらのんびりするのか。自分で自分の心が自由にならない。ほんたうにどうして居るのかしら……。

しらず／＼うつとりとした時、「ガタガタガタ」雨戸を操る音。いつもくだまされてにくらしい一つ運だめしだ。見張りをしてみようと、まくらをとれば、それは、待ち遠しかった母の開けた音であつたのだ。恐しさの中へ迷ひ込んだ魂は、此の時の歎息と共に夕立の後の様に、其のいやなく空は、見知らぬはるか彼方へと、いつの間にか消え失せた。



【評】鼠や猫なども馬鹿には出来ないといふことがしみ／＼思はれるでせう。夜の世界が来るとすべてが人間をおびやかす。

### 30 淋しい音（IW） 70点

月は凄い程冴え渡つてゐる。星も寒さうにあたかも月の従者の如く瞬いてゐる。寂しく、墓所のやうな冬の夜半で、私は寂しさをこらへながら読書してゐた。この世にたゞ一人残されたやうな淋しさは時がたてば、たゞ程私の身にせまつて来る。オ、何といふ淋しい晩であらう。私は今までこんなにおそくまで起きてゐた事は、稀であるので、しみ、時の淋しさを、しみ／＼と、味はされた。丁度その時である。私が寂しさに涙ぐみながら、机にうつむいた。戸がガタ／＼とした。その瞬間私の体は冷水を浴びせられたやうにわな／＼いた。淋しい上になほ淋しさがました。きつとその時私の顔は色がなかつたでせう。それでもなほ私は淋しさをこらへながらじつとしてゐた。やがて音のした方で、三毛の啼声があった。私の顔はよろこびに満ちた。それは三毛がねずみを追つて来たから、あんな音がしたのであらう、とわかつたからである。「ホツと安心した。」それから一しきり勉強して床に着いた。室内は静まりかへつてゐて何の音もしない。たゞ時計の音が、カチ／＼と聞えるのみ。

【評】深夜のさまがよくかけてゐる。前半がことによい。

### 31 夜半の響（MN） 70点（二月二日作）

私はふと目が覚めた。時計は十二時を指してゐる。あたりは水を打つたやうに静まり返つてゐる。唯静けさを破つてセカンドの響のみが、耳の奥までもしみ込むやうに、淋しくも正しい時を刻んでゐる。

私はほんやりと天井のふし穴の一所をちつと見つめてゐた。と急に「がた／＼ん」といふ、かなり大きな何か落ちたやうな音、其の間、ぎつと心臓に針でもさされたやうな気がした。何だらうと思つてちつと耳を澄ましてゐると、又「がた／＼」と何者かが戸を押したやうな音に、私は再びぞつとした。もうちつとしてゐられなくなつて、頭からふとんをかぶつてしまつた。誰かを起さうかしらと思ひながらちつと苦しい息をこらへてゐた。一分……二分……もう何の音もしない。

唯心臓のこどろのみが、荒い波を打つてゐる。やがてそつと首を出して様子を見ると、妹のかすかな寝息の外に何事もない。あたりは元の無気味な静けさに帰つてゐる。やう／＼胸をなで下ろして、自分も眠らうと静かに目をつむつた。冷たい夜の空気は静寂と共にしん／＼と更けて行く、やがて目覚めてゐるものは時計ばかり、あらゆる生物、無心の草木も深い／＼ねむりの底に落ちて行つた。

【評】一瞬のおどろきぶりがはつきり出てゐる。たゞ少し事件が単純すぎるといふうらみはあるが。

### 32 冬のチャラメラ（SJ） 70点（一月二日作）

びう／＼と木枯の吹きすさぶ夜。一人私は炬燵の中にて凍つた路行く人のせはしげな足をとを耳にしながらく／＼と今しもどんと一発



ピストルを合図に漕ぎ出すところだった。と、びゅう／＼／＼車の音を伴った支那蕎麦売のチャラメラー。私ははつとして目をこすりながら柱時計を見た。勤勉家の時計さん平気な顔してカツチリ／＼十一時を越してゐた。驚いて床にもぐりこみ支那蕎麦屋のごとこをやつてゐるのを聞きながらあのぼつぼと上る湯気。お腹の底から温りさうな支那蕎麦を想像しながら又もとろとろしはじめた。ごとこといふ音はたと止んだ。とが／＼といふ車の音。しばらくして淋しきチャラメラーの音。車の音チャラメラーの音は刻一刻とうすれ行き遠ざかつて行く。と供に私は安らかな夢路へとたどり着いた。支那蕎麦売の吹き鳴らすチャラメラーの音。寒き淋しき冬の夜には一そう私等の胸に深く／＼響き渡るのだつた。

【評】大分くひ意地がはつてゐると見える。十一時でお夜食がほしくなつたのか。前半に文語体のまじつたところのあるのは、読み直しの足りないことを示してゐるものだ。

### 《評点六五点》

#### 33 なつかしき夜の響（一N） 65点

あたりはいつしか夕靄にとざされて居た。となりの室からは静かな寝息が聞えてくる。私はゆつたりとした気持で、故郷の家を見渡した。あたりの物が一つとして、私を引きつけずには居なかつた。私は「こんなゆつたりとした気分で学校へ通はれればいいんだがなあ」と、しみじみ思つた。少しの年月の内に變つた家の中を見て、幼かりし時の

楽しき思ひ出を記憶から呼びさまさうとして居た。時にカチーツ、カチーツと、拍子木の音が響いてきた。

私は其の音が遠く次第に分からなくなつてくるまで、じいと耳を傾けて居た。あゝ、あの音も私にとつては忘れられない音である。あのカチーツ、カチーツと言ふ響によつて、村人達はどんなに安らかな夢路をたどつて居ることであらう。此の寒い夜に拍子木を打つて居るのは少年であらう。さうでなければ青年であらう。いや／＼それとも老人であらうか。

此の寒い夜を村人達の為に打つ拍子木の音は真心から打つ音のやうに強い／＼響を持つて居る。

【評】忘れられないなつかしき拍子木の音はよいが、それからその打手など今更らしく想像して居る所は此の文の力を弱める。一途に其の懐かしさをかいた方がもつと引しまつてよくなる。

#### 34 チャラメラの音（N） 65点

私はふと目を覚めた。物思ひにこの間死んだ、小学校の時のお友達のこと思ひ出して、私は淋しく思つた。此の間までは、二人で元気に楽しく、勉強したり、遊んだりしてあんなに仲のよかつた久ちゃん。「どうしてお休み中に久ちゃんがお向いにいらつしやつて下さつたとき、あたしどうして行かなかつたんだらう。」あのとき遊びに行けば、久ちゃんの特徴ある笑顔が、更にはつきりと、永久にのこされるのに、何て考へてた時、かすかに流されてくる音をきくと、チャラメラの音

であつた。あの哀れな音は私の心の底まで食ひ入るように感ぜられました。何て可愛さうなんだろう。私はもう夢の国から帰つて来たのに、あの支那そば屋は………「もう十二時だ。」

久ちゃんは今もう永久に暗黒の世界に旅行してしまつて、今頃は何をしていらつしやるのでせうか。きつとやすらかな夢路をたどつて居るかもしれないね。

チャラメラの音はだん／＼近くなつてきた。あの支那そば屋は、あゝして毎年今頃まで、車を引いて歩いて居るのかと思つたら、一層チャラメラの音は淋しく聞いた。

【評】亡友の思ひ出とチャラメラの音との間に特別の関係もないやうで感激がうすい。

### 35 恐しき物音（〇ー） 65点

昼のざはめきは静寂にかへり、時計の音のみが、興奮しきつてゐる私の心の中に、いら／＼しくひびいてくる。

あたりには、かすかなあまい／＼ねいきが、淋しく聞える。苦しき空想が続けられた。私の心は益々あせる。だがいつになつて、ねむれるのか、時計はためみなく進行を続けてゐる一分二分………。

私は口の中で一二三を唱へた。

父母います懐しき故郷のことが、それからそれへと連想されて、思はず涙をうるませた。

天井では私の事も知らないで、盛にねずみの運動会が開かれてゐる。

廊下には心の迷か、人のすうすうとあるく足音が、おそろしくひびき、私は全身に水を浴びせかけられたかのやうにぞつとした。またも、あたりの静かさを破つて、みしりぎち／＼と戸をこちあけるやうな音が聞えて、私は恐しさに胸は早鐘の如くなつた。

再び静寂にかへつた。あたりはねいきと、カツチン／＼といふ時計の音のみがきこゑ、外には時を知らず、チャキ／＼といふ拍子木の響が、此の寒空にあはれ淋しく消えていつた。

【評】深夜の物音——よくある題材です。表現に今一工夫がほしい。

### 36 寒き夜の音（ーー） 65点

冬の弱き日の光も、一日の活動につかれ、西山に眠る頃、あたりは暗き幕にてとざされ、冬風一層身にしみて寒い。空には月が冷めたい光を投げてゐる。星も寒さうにまた、いてゐる。自分も一日のつかれで、冷めたき床に入つた。しばらくの間眠りにつかれず、たいまなくせつ／＼と時をきざむ時計の音、天井のねずみの音、終列車のひびき、いづれも淋しき寒さを増す、冬の夜に起る音を聞くのである。何とも言はれぬ淋しさに、寒さも一入増して、やがて眠りにつかうとする。夜も更けし頃、我が耳にかすかに不思議な音がする。パリン／＼、はて何だらう。まさか天狗の仕業でもあるまい。しばしは妙なあやしみの思ひに包まれてゐたが、やつとわかつた。此の寒さに堪へかねて河の水が凍つて張りきるに、あの様な、パリン／＼、と言ふ音がすると昼間、家の人たちの話が思ひ出された。それを聞いて、又も寒さが増

して来た。早く眠つてしまふ。床も暖くなつて来た。いつしか眠りに  
ついて、夢の国を廻つてゐる頃、パチン／＼と言ふ音に破られた。そ  
れは、汽船の水をたゝく冬の朝の音である。此の頃の氷は、例年にな  
い厚いしかも河に張り切れてしまふのだから、さだめし船夫も骨が折  
れるだらう。気の毒になつてきた。自分は暖き床を離れるにしのびず、  
其の音を聞いてゐた。

【評】夕暮から夜―それから朝までを三頁にをさめてしまつたのは乱  
暴だ。少し不自然な記述だ。

### 《評点六〇点》

#### 37 静かな音 (KD) 60点

あ、どうしてこんなに静かなのでせう、あ、そうだった、考查が始  
まるのだ。

こうして考查になれば私達は十分間の休時間でさいも本をひろげて  
廊下を歩き、放課後は運動どころではない、唯一人大きな声を立てる  
人もないといふ静かな教室校庭、朝は早く登校してお友達と一緒に勉  
強し時間もせまつて考查教室にはへり波うつ胸をおさいて先生のいら  
つしやるのをまつております、間もなく先生がいらつしやへまして考  
査始めの合図のかねが「ジゝゝゝ」と静かな教室に響き渡つた。す  
ぐに考查の紙が一人一人渡された。胸の中は波うつておる、しばらく  
紙を見つめてやがて二三分もたつたかと思う頃に鉛筆のはしる静かな  
音がかすかに聞いてくる。先生は大きな眼で見はつております。唯一

人横をむく人もなく鉛筆をつよくはしらしてゐる。時間も刻々とすぎ  
て行く、階上の教室から廊下に出る足音、これも静かな足音である。  
まあなんと静かなんでせう。

【評】さばがしい生活の中の静かな生活は一つの見つけものです。

#### 38 おいしさうな音 (YS) 60点

遠くには小高い小山の風の音、近くには冬の夕べにふさわしい寒風  
が庭の木々に当つて、気持悪い音をたてゝゐる。前も後も森の中にか  
こまれた我が家では、黄色い電灯の下で、お茶わんの音がしてゐる。  
私達家内の人は何をしてゐるのかと台所にゐるお母様の方へ目をやら  
れる。するとお母様はお茶わんになにか一生懸命よそつていらつしや  
るので、何をよそつてゐるのかと思つたら、今日はえびすさまだから  
なにか御馳走があるのだらうとお父様の声、其の中にお母様が持つて  
いらつしやる。なんだらうと私は手を出すことも出来ないで其の方へ  
目を注いだ。其の時静まつてゐた時急に弟があら「おそは此の頃おそ  
ば始めて」などと云ひ始める。お母様はお父様から次々と皆にくばら  
れた。そしてお母様は一番終りに取つてお食へになつた。その時まで  
戸外の様子もわからないであたら庭は風邪がびゅう／＼吹いてゐるの  
だった。こんなに風が吹いてもしも、火事でも出来たらと祖母様の声。  
其の内に皆は食べてしまつた。お茶わんにおはしのふれる音、お母様  
のおよそひになる其の音、庭はたゞ／＼とする風の音のみ他には  
何の音もわからないやうである。

【評】「おいしさうな音」といふ気の利いた題なら、その寒い／＼夜に「おそば」をする音をもつとはつきりと表はしたがよいに……何だか物足りないね。

39 淋しき音(WT) 60点(一月一九日作)

世に生を受ける凡てのものは、黒きとばりに包まれて、安らかな夢路に入りました。

たゞ耳に触れる物は、柱時計のきざみ行く音のみ。何の音もしない静寂な夜は、だんだん更けて行く。

何んの音もない室内は、深い眠りの国へと無言のまゝ、行進を続けてゐる。

遠くからは微かに夜回りの音が、カチ／＼と澄きつた空氣に触れて、物淋しく響いてゐる。

あゝ、あの淋しき音、淋しき響、あの音は世の人の為に響いてゐる。いやそれから人の心を落着かせる。そして淋しさを感じさせる。

あの夜回りのカチ／＼と言ふ音、カチ／＼といふ響は誰の心にも、落着と淋しさを感じさせる事であらう。

あゝ、淋しきあの夜回りのカチ／＼と言ふ響を立ててゐる人は少年であらうか、それとも青年であらうか。いやそれでなければ老人であらう。何んと淋しさを感じられる淋しき音ではないか。

あゝ、淋しい夜回りの音はだん／＼遠ざかつて行く。  
時は更に十二時半を告げてゐる。

あゝ、なんと淋しき音であらう。

【評】少々感嘆詞が多すぎる。「あゝ」とか「淋しい」とか言ふ言葉を表面に出さずに、おのづと淋しさに涙ぐませるやうに書くのが上手といふもの。

40 おそろしい音(TN) 60点

自省終り、消灯とあわたゞしい鐘の音と共に、今しがたまで、さほどまでに、ざわめいてゐた室も、今はひっそりと静まつてゐる。

静かな部屋のなかには、鼠の天井を駆け回る音と、安らかな夢路をたどるらしい、微かな夜の寝息の他には何物も聞えない。

私は真暗な床の中で、眠れないままに、頻に寝返りをうつてゐた。其の時、窓の方でガタン／＼といふ物音がする。深夜の闇を破る物音。はて何音だらうと私の心は、急におそろしさにおそわれた。

じつと息を殺してゐると、ますます音は、激しくなる。いよいよ大変、夜具を頭から被つてしまった。そして一秒二秒と物凄い時は刻まれていつた。

暫くの後不安な中に頭を少しだれてゐると、さつきの物音はどうやら静まつたらしい。でも、まだ私の胸の鼓動は、やまない。そして部屋の中は又、元通りの静けさにかへつた。

深夜のおそろしい物音、私を脅かした物音は……それは風の音であつた。

【評】最後の所で一寸気の利いた転向を見せてゐるが、全体としては

何だかこしらへもののやうな気がしてならない。もつとはつきりと、深く作者が自らが感じるやうに習慣づけるがよからう。

#### 41 夕暮の音 (NJ) 60点

コツ／＼、いつもの通り夕暮時、川端に沿ふた野路をいそいだ。後からかさ／＼と音をたてながら、誰やらついて来るやうな音がする。思はず後をふり返つたが、誰も来る様子もない。たゞ汽車の走る音がかすかに聞えて来る。所々の森かげに薄もやのか、つたやうに見えるのは夕食の支度の煙であらう。彼方の寺からは夕べをつげる鐘の音が聞える。

門からばた／＼とかけこんだ。家の中はまるで戦争のやう。はたきをかける音、座敷をはく音、火のパチ／＼もえる音、雨戸をくる音、いろ／＼の音のコーラスである。やがて一時間の後には静まりかへり、ただふけ行く夜るに、ねずみの歩む音のみがコト／＼と、さびしく響きわたる。

【評】夕暮時のおとをこた／＼に取に並べたといふ趣がある文だ。夕べを告げる鐘が、鳴る頃に「うしろから脅かされるやうな」とは何だかまだこれほどおそくないのにと不自然なやうに思はれる。「鼠の歩む」もどうもしつくりと来ない。

#### 42 こがらし (MR) 60点 (一月二日作)

朝早くからすさまじく音を立て、西風はみをつんざくばかりに吹

いて、あらゆる物体にあたり恐しい風に家の者は火の用心に注意して居ります。

夜に入つてもやむけいせきもなく絶えず山おろしに吹いて居ります。空には星が数しれず輝いた光を地上に放つて居ります。其の心持は何といつたらよいかわかにはいふことが出来ません。次第に夜は更けてたゞ聞えるものは風の音と土びんのいたつチン／＼といふ音ばかりです。十時を打つ音に夜回りの回る頃となつて拍子木をたたく音も風にふきながされてかすかにチャキ／＼と聞えるぐらゐのものでした。かすかに聞える拍子木の音を夢うつつに聞きながら眠りにつきました。私が朝目を覚まして見ると風に昨日のいきほひはどこいやらいつてしまつて、東の空より太陽はにこ／＼として顔を出して私達のために暖い光を放つて居ります。

私は愉快な心持で妹と二人で学校にといそぎました。

空には飛行機がすさまじき音を立て、此の広く大空を我がものたばかりに飛んでおります。ブーン／＼と。

【評】「こがらし」の妻さがまだかき足りない。あとの方は無理に書き足したやうな感じがする。

#### 43 恐しい音 (YY) 60点

カチ／＼と時を刻み行く。時計の音が静かな室に、大きく響く。

皆家の者は、楽しい夢路を辿つて居るやうである。かすかな寝息が聞える。私一人はどうしても、眠れない。ぎゅつと目をつむつて見た

が、やつぱり駄目……。

かうして居る間も、時は容赦なく、流れて行く。その時一寸、頭に浮んで来たのは、来週の火曜日までの、作文の宿題だった。寝られぬまゝに起きて、考へ始めた。あれかこれかと、考へて見たが、うまく良い考へが浮んで来ない。それで今度は静に目をつむつて、考へてみると、戸棚の方でことんくと音がする。始めの内はねずみだもの、恐くないと、思つて居たが、又ことんくと前よりも、大きな音を立てるので、臆病な私は、もう起てられないで、帳面も筆入も、机の上に置ばなしで床に就いてしまつた。

床についてから、今のあの音は何んの音であるかを、想像しながら居ると、カチ／＼と言ふ、拍子木の音が、聞え始めた。其の時、時計が勢良く、十一時を知らした。

【評】結びの方に変なこはがらせた音について何も解決していないのは、しりきれ蜻蛉のやうな気がする。まとまつてゐない文だ。

#### 44 除夜の鐘 (MT) 60点 (二月二七日作)

ふと目をさまし、あたりを見回はずと、弟は大きな軒をかき、枕に番をさせてゐる。

自分の枕元を見ると、昨夜読まうとして、枕元に置いた雑誌があつたので、読んであるとぼう／＼と、除夜の鐘の音が聞えてくる。私は読むのをやめて、鐘の音を聞き入つた。其の音が私には非常に、気に入つた。そして何時までも／＼それを聞きたかつた。けれどもさう

することは出来なかつた。

それでも其の音の余韻は、まだ私の耳になつてゐる。少し立つて、又本を読んだ。頁をかはず度毎に、気持ちのよい微かな音を立てる。

折しも時計が六時を討つた。私の家でも女中が起きて、朝飯の支度をしてゐる。口を開ける音、座敷を掃く音が聞えて来る。

私も女中が働いてゐるのに、寝てゐるのはかはいさうだから、いきなり起き出す。女中が「ずあぶん早いこと」と私を見る。

今太陽が東の空から、に／＼とお顔を出して、下男を照らしながら、旅をしようとする頃、又しても鐘の音が聞える。

あはれ鐘の音よ、野辺の草々、山の木々、うつしよの音楽を聞きなさい。あの高殿でつきならす、鐘の音を聞きなさい。

あ、憧憬の鐘の音よ。

【評】(無し) (この作品には「二月二七日作」と書き添えられているので、遅れて提出されたものと推察される。―引用者注)

#### 45 けたゝましい音 (MU) 60点 (二月二三日作)

あたり一面には黒いカーテンが下されて、冬にはふさはしい夕暮であつた。其の時ふと私の耳にはけたゝましいサイレンの音が聞えた。私は角へ飛び出した。見ると薄墨色の空には赤く見えた。私は思はず「火事だ」と叫んだ。

消防小屋の前には消防の者が集まつた。其のうちに武機は出された。

けれどもあまり大きな火事ではなかったのでポンプは行かなかった。だん／＼サイレンの音も遠く消えて行く。そして火事の方向もわからなくなつた。消防の者もポンプをしまひ退却を始めた。

あたりは全く暗くなつた。家々では夜の食事が始まつたのであらう、方々から食器の音が聞え始めた。

【評】末句にいたつて、ピンとはねかへつてゐる文だ。

#### 《評点五五点》

#### 46 拍子木の音（NU） 55点

寒い夜だ。私は部屋に、一人ぼっちで編物をしてゐた。あたりはしんとしてゐる。編物する手を、進めてゐた。隣の部屋は、ぐつ／＼りねこんで、しまつたやうだ。誰れかの寝いきが、たかくと聞える。

私は眠い目を、ぱち／＼させて、もう一寸とせいでいた時、いつのまにか、手をやめて、頭をゆつたりさげてゐた。はるか彼方にチャキン、チャキンと、いふ拍子木の音がした。「あつと」我にかへつた。その音が続く。なほさらさびしくなつてしまつた。今夜は出来あがらないかしら。……手がつめたい。体はぞく／＼する。こまつたなあ！ もう止めよう。時計は何時だろう。おうおせい。では手を暖めて体みにしよう。

チャキン、チャキンと近くに聞える。体を暖めようと思つたが、火がない。頭がむ／＼とした。火を少しこしらへて、私はお、いばりで、あたたまつた。随分暖かい。体を猫のぼけたやうにしてしまつた。隣

りまで回はつて来たやうだ。耳をすまして聞いてゐた。我が家に来る。拍子木は、さえた夜冷めたい空氣にふれて、さびしさうな音、チャキン、チャキン、と足音のさく／＼する音、かはるがはる聞えて来る。「こんばん」と元氣さうに言つた。ないし、うは、寒いのであらうなあ。お気の毒だ。こんな夜に回つてくるのも、村が可愛い為めであらう。風がすうとふきこむやうだ。私は寒さとさびしさに、身ふるへした。手ばやに編物を片付けて床についた。

【評】もう少し整理してかいてほしい。順々にありのままを並べただけではよい文にはならぬ。どこに中心をおき、力をもたせるかの所を予定して。

#### 《評点五〇点》

#### 47 暁の朝（FT） 50点

静寂な単調の音が、私のまくらもとよりなありだした。

昨日のつかれで、ぐつ／＼と眠つた私を、そう単調な音によりて起してくれた。

目をさましてあたりを見まわすと又だれもかれも、無言の直行を続けて居る。ただねえさんだけが起きて、かしきをしてゐるらしく、勝手も上の方より、せと物にふれる音が盛に新線な空氣を破つてつたはつて来る。（傍線は原文のまま。——引用者注）

だんだん朝のけはひがはげしくなつて来てあたりはだんだんにぎやかになつて来た。



やがて岡谷の起床の笛があたりの静けさを破りつたはつた。

私も岡谷のきてきがなつては起きなくてはならなえと思つて、あのあたかへ床の中を元気よくはね起きた。

【評】目ざめから離床までの間の物音を書いたやうであるが、あまり雑然としてゐてまとまりがない。題も変だ。

#### 48 夜中 (KW) 50点

ふと目をさしました。黒いきれでおほはれた電灯のにぶい光が室中にみなぎつて居ります。すーくと言ふ妹の心地よささうな寢息。

突然「がたん。」と言ふ音がした。「はつ」と思つてふとんの中にもぐりこみました。

数分の後そつと首を出しました。時計がかちくときをきざんで居ります。ふと遠くの方で夜回りのちりんくといふりんの音が淋しく聞えて来た。

妹はと顔をのぞくと相変らずやくとねむつて居ます。間もなく私も夢路をたどりました。

ちりんくとお茶の間の時計が二時を報ずる様でした。

【評】大したこともない。もつとその目のさめてゐる間の生活を詳しく反省して、中心を強く描くと、よくなる。

#### 49 寒さうな音 (NR) 50点 (一月二日作)

雨戸をたたく木枯の風強く吹き渡る。

チリンくくくく何処からか夜回りの鐘の音が聞えて来る。うつ

らくになつてゐたが何時のまにか目をさましてしまつた。誰も今頃起きてゐる人はなく、しーんと寝静まつてゐる。ごーごーといふ風に

まじつてだんくく音が高くなつて来る。家の前を通り越して東の方へ回つて行く様子である。時計はまだ十一時を少し過ぎたばかり。この

吹き荒む風の中を回つてゐる人はどんなに寒いだらうと思はずにはゐられなかつた。

チリンくくくく寒さうな音はだんくく聞えなくなつて行き、犬の遠吠かすかに聞えて夜はますます更けて行く。

【評】ありふれた素材をありふれた形でかいたもの。もつと作者独特の感じ方が出来ぬものか。

#### 50 起床のお鐘 (SI) 50点

清々しい朝の空気をふるはせながら起床のお鐘が鳴りました。後は淋しい余韻が微かに長い尾を引いて何処かに消え失せます。

私達二百余名の寄宿舎生はこの勇ましい鐘によび起こされます、ちやうど女神がはるく遠い天国より、私達少女に新朝を告げに来て下さる様な微妙な音が致します。やがて町の人、舎の少女も深い夢路より覚めて一日の活動は開始するでせう。日曜の日には、お鐘を悪口

言ひます。私達は温いお床を離れるつらさをせつかくの楽しい夢を折られるのです。其んな時には起床のお鐘はどんな気持で天国へ帰つて行く事だせう。其んな時には女神様のメロデーは私達のものう気な心



を呼び起すが如く、私達の頭に強く強く鞭打つと聞えます。そして自分の疲れも忘れて何時までも奏して居る様に感じられます。後は私はいらない、影も形もないメロデーの曲をうらんだ事を悔います、メロデーはかうして、あの冷静な風、空気をもちとはず毎朝私達の心を呼び起して下さいます。さうして哀れな悲しい余韻の尾を引きながら……。

哀れな短命な其の余韻よ、やがては女神のメロデーも倦み疲れ、私達少女の為に、命は、消えるでせう。私達はこれからは随分起床のお鐘を尊びませう。

【評】思ひつきはよいが、まだく表現の方に物足りなさがある。

## 五、おわりに―金子の作文評価と暗示的指導

右に挙げた生徒作文に対する金子彦二郎の評言には、なかなか手厳しいものがある。着眼の良い作品を高く評価する一方で、素材のありふれた作文や、主眼の焦点化ができていない作文に対しては、再考することを強く求めている。

また当然のことながら、段落分けの出来ていない生徒の作文に対する評価も低い。ところが、個々人に対する評言の中に、段落分けに言及したものはない。36番・38番の作品のように全く段落分けのされていない作品や、44番・48番の作品のように数行ごとにすぐに改行してしまう作品についても、内容面の整理や充実を要求しているだけであ

る。段落分けについては文章表現の基本であるから、個々人への評言としてではなく、実地授業時に総評として取り上げ、全員に自覚を持たせようとしたのである。発想・着想を重視する金子の姿勢は、こういう点にも現われている。

では、個々人への評言には、どのような特徴がうかがえるか。以下、その典型的な事例を取り上げ、記述前に行われた暗示的指導と、記述後の評言との対応について考察しよう。

### (1) 独自の題材の重視―着眼点に関する評言

金子が最も重視するのは、着眼の善し悪しである。「深夜の物音」「夜回りの拍子木の音」「時計の音」など、誰もが思いつきそうな平凡な材料を取り扱ったものは、評価も低い。それに対して、「機織りの音」「鉄の音」「桑摘みの音」「おりんの音」など、着眼点のよいものは、文章としてのまとまりもよく、高い評価を得ている。

例えば、13番の作品に対しては「これは珍しい題だ。まだく十分練るところはあるが、とにかくまとまって居る点がよい。『チーン』たしかに清さがこもつてゐるやうだ。」と評し、14番の作品に対しては、「これは他の人の見つけない世界を描いてある。文もかなりに練られてある。さざ波のさらりくの清くしめやかな音にふさはしいよい文。」とほめている。一方、48番や49番の作品に対しては、「大したこともない。もつとその目のさめてゐる間の生活を詳しく反省して、中心を強く描くと、よくなる。」「ありふれた素材をありふれた形でかいたもの。もつと作者独特の感じ方が出来ぬものか。」と手厳しい。

(2) 主想の焦点化の重視―選材に関する評言

仮に材料の選択が良かったとしても、あまりに多くの材料を寄せ集めてきたものについては、高い評価を与えていない。印象が散漫になるからである。良い材料を見つけた上で、どこに焦点化するかということが肝心だというのである。

事例としては、8番の作品に対する評「大体ととのつた文であり、主想もはつきり読まれるが、前半にあんまり『音のいろ／＼』をこたく／＼と出しすぎて居る。」や、25番の作品に対する評「所々に新鮮な描写があるが、全体としてあまりこたく／＼並べすぎてゐるやうに思はれる。」などが挙げられる。

(3) 気の利いた題の重視―文題に関する評言

主想と文題との対応も重要である。明確な主想を持った上で、文題にも工夫を凝らし、読み手を引きつけるようにしなければならない。その典型は、公開授業でも紹介された1番「廃れ行く音」や2番「恐ろしい爪音」に見ることができる。

一方、せっかく魅力的な文題を付けておきながら、主想が乱れては意味がない。38番の作品に対しては、「おいしさうな音」といふ気の利いた題なら、その寒いく／＼夜に『おそば』する音をもつとはつきりと表はしたがよいに：何だか物足りないね。」と助言するのである。

(4) 期待を持たせる書き出しと展開―構成に関する評言

意外な書き出しで読み手を引きつけ、次に起こることを期待させる文章展開に対して、金子は高い評価を与えている。「景」よりも「事

件」を取り上げた作品にみられる評言である。

2番の作品に対する評「静―小動―大動―静という組立てもよく考えられている。」や、12番の作品に対する評「だん／＼と事件の頂点へ引つばつて行く手腕は、なか／＼にすぐれたものだ。何かしら／＼と思はせられながら、読者は固唾をのみつつ、読み進ませられて行く。」を例として挙げることができる。

(5) 多様な表現形態の勧め―文体・表現技法に関する評言

文体に関しては、できるだけ多様な表現を試みるように奨めている。生徒たちの作文はややもすると記事文や叙事文に偏り、発想も狭くなりがちだから、違う文体を試みた自由詩(14番の作品)を高く評価し、柔軟な発想をするように求めているのである。

表現技法に関する評価は、圈点を付けた箇所から窺うことができる。その場の様子をうまく伝えている比喩表現や、動きの感じられる表現に対する評価が高い。30番の作品などは、素材は平凡であるが、描写のうまさで70点の評点がもらえたのであろう。

また、39番の作品に対して「少々感嘆詞が多すぎる。『あ、』とか『淋しい』とか言ふ言葉を表面に出さずに、おのづと淋しさに涙ぐませるやうに書くのが上手といふもの。」と述べるなど、描写上の留意点を具体的に指摘していることなども見逃せないところである。

以上の評言に見られるように、金子は、暗示的指導によって提示した「新しい題材の発見」「題の工夫と主想の焦点化」「表現の工夫」に対応させて、作文処理の段階においても、発想・着想・構想に重点を

おいて評価した。その具体的内容は、①「材料（素材）の選択」、②「主想の明確化」（以上、内容面）、③「題の良否」、④「書き出しと文章の展開」、⑤「観察の優れた描写」（以上、記述面）を中心にしたものであったとまとめることができる。

### 【注】

- \*1 「各中学校に於ける作文教授の実際」『國學院雜誌』第三九卷第一一號、一九三三年一月
- \*2 「暗示的指導」の實際は、金子彦二郎『女子作文の考へ方作り方及び文例』（明治出版協會、一九一六年）や作文教科書『現代女子作文』全五卷（光風館書店、一九二五年初版、一九三〇年修正再版）に多くの事例を見ることができる。
- \*3 初出は、金子彦二郎「作文科実地授業の記録」『考へるよりも歩め』第八輯、光風館書店、一九三五年
- \*4 野地潤家「旧制中等学校の作文教育」『野地潤家著作選集』第九卷、明治図書、一九九八年

### 《追記》

本研究のために、貴重な作文資料をご提供下さった金子俊也氏に、心よりお礼申し上げます。

（たなかひろゆき・本学助教授）